学校教育実践コース（保健体育専修）・健康スポーツコース，テニス

グラウンドストロークの身体で感じることの伝え方

保健体育・鵜川　是

1　教師と教師の卵が求めることの一致

実技の授業では、毎回、教師になった時に、その種目（今回はテニス）を学級の皆がその人なりにできるように指導できる指導の仕方を学ぶためにあることを確認して、そして特に学級のできない人に指導できる指導の仕方を学んで欲しいと授業を始めます。しかし、教員養成学部の授業でありながら、実技の授業全般でこのことがまだ定着していないように思われます。講義でも、スポーツ教育における二極化の問題は教師の指導の仕方にも問題があると話しています。つまり、教師が学級の中のできない人への技の指導の仕方を知らない傾向から、特にバドミントンやテニスの授業では、できない人同士でラリー練習をできるように指導できないし、また、できない人とできる人がラリーをできるように、できる人に協力をして貰う指導ができないようです。極論かも知れないが、そのことが単元の早期にゲームをさせることに繋がっているように思います。

教師の卵がこの「協力させる指導力」を身につけるためには、できない人の仕方（でき方）を教師の卵の身体で知っておく必要があります。できない人の仕方をできる人にも伝えないと両者を協力させることができないからです。今までの教員養成では、教師の卵ができない人の仕方を問題にすることは少なく、教師の卵が自分の技能を高めると指導できると考えてきたようです。この授業でも、力任せでボールを打ち相手をやっつけようとする打ち方をする教師の卵が多いと感じました。確かに彼らには身体能力があるから、ラリーはある程度続きます。それで教師になった時にできない人に教えられるのかと聞くこともありました。その場にレディネスの少ない人（できない人）がいないこともありますが、教師の卵にできない人への指導の仕方を伝えることはつくづく難しいと感じます。

教師は、本来強さよりうまさを身につけていないと、もっと言えばできない人の仕方のうまさを身につけていないと指導できないと考えています。つまり、できる人にもできない人なりのうまさを伝えないと、両者が協力できないと言うことです。この「協力させる指導」の考えもまだ明確にないし、技（表題のグラウンドストローク）の身体で感じることを伝える必要性の認識もなかったようにも思います。逆にこの認識がなかったから、「協力させる指導」の考えもなかったのかも知れません。

グラウンドストロークの身体で感じることとは、ラケットの振り出しのタイミングやスイングの速さや力の入れ方やスイング全体のリズムなど（以下には力動性と呼ぶ）のことです。勿論、動きの形（スイングの軌跡や大きさ）も身体で感じる必要がありますが目で見えることです。できない人の能力状態も、相手の能力状態も多様性があります。特に身体で感じる力動性に多様性を認めて伝える必要があります。そのためには、教師が彼らの能力状態で打球をコントロールできてラリーができる打ち方の力動性を幅広く教師の身体で知っておく必要があります。できない人の生の動きを観察しながら彼らの運動感覚世界に入り込む運動共感をして彼らの力動性の良否判断を手伝い、「もっとゆっくり振り出して」「そんなに力を一気に入れない方がいい」などの指導をして、彼らとやり取りをしてそのできない人の今の状態に応じた指導をすることです。そのできない人にも自分がどう動いているかを自己観察して貰わないと、教師の指導も伝わらないことになります。先にも述べたが、その場にできない人が余りいないから運動共感や良否判断や自己観察させることの必要性を教師の卵に伝えることが難しいと感じています。

教師の卵に伝えたいことがもう一つありますが、それもなかなか伝えられません。ラリーを続けられないとコツとカンの一体化が生まれないことになります。ゲームでグラウンドストロークを自由自在にできる人はこのコツとカンが一体化したカードを一杯身につけているからです。カンとは相手の打球や相手がどう動くかなどの状況を先読みできる能力と、先読みした状況に適切な課題を選択先決めできる能力のことです。この選択先決めした課題を解決できる要領がコツです。ゲームで自由自在に打球をコントロールできる人は、状況先読み、課題選択先決め、課題解決が一体化して自動回路的にでき

ることです。よく言われる「身体が知らぬ間に動いてできる」ということです。この自動回路をカードと呼ぶことにします。ゲームができる人はこのカードを一杯身につけているから、つまり、できることがあるからできるのです。

できない人が、グラウンドストロークを身体が知らぬ間に動いてできるようになるには、段階を踏む必要があります。彼らは今身につけている状況先読みのカンとコツで対応できない打球がくると，課題を先決めするカンは養えないし、それを解決できる新しいコツを掴むことはできないことになります。特にできない人はラリーを続けないと先決め課題（カン）とそれを解決するコツが一体化しないのです。そのラリーを続けられるコツを掴ませるには、先ずは緩く手投げされたボールを打たせて、ラリーができそうな打球をコントロールできるコツを掴ませる必要があります。先にも述べたが、教師の卵は身体能力があるから、この辺りのことが余り理解できないでそれを身につけようとはしないようです。

上記のことは、教師と教師の卵の間で目指すことの一致が少ない傾向があるということです。教師の卵ができない人の能力状態で打球をコントロールできてラリーができる打ち方の特に力動性を幅広く教師の卵の身体で知っていないと、できない人に適切な課題を与えられないし、運動共感して個に応じた指導ができないということです。教師の卵がここを認識、実感しないと、教師の卵が教師になった時に、また教師と学習者の間で目指すことの一致が生まれないことになります。

教師の卵の中にも、直ぐにはできない人がいます。ローテーションをして色んな人とラリーをさせますが、相手の出来具合に合わせて打ってあげることができないと言うか、しない人もいました。ある程度ラリーを続けられるようになると、サーバーとレシーバーで4回続けて、サーバー側からストレートにロブを上げ6本目が相手コートに入れば，どこへ打ってもいいができるだけラリーを続けるようにというダブルスのゲーム練習をさせます。そして位置取り、連絡取りの練習をさせます。これも教師になった時にできない人のカンとコツの一体化を目指したものです。そこを理解しない教師の卵もいたように思います。

前述のように中学、高校でのテニスの授業では単元の早期にゲームをやらせるようで、できない人は続けようとしているラリーでも打球をコントロールしてラリーが続かないのに、難しい課題が押し寄せてくるゲームをする慣習のようなものがあると思われます。できない人は、常に今の自分の能力状態より難しい課題を与えられ、結局、技をうまくできないまま、ただゲームをやらせて貰って授業が終わるようです。他の多くの種目でも、できない人にはそんな慣習が今の学校体育にはあるように思われます。まずは、教員養成の授業で教師と教師の卵が目指すことの一致を考慮する必要を感じます。

2　学習者の授業への感想など

「正直、初めはこのようなことをやっていて本当に上手くなるのだろうかと思っていた。でも徐々に自分の体にしみついてきて、自分でもわかるぐらい上達したと思う」と感想を書いてくれた人がいた。できない人への指導の仕方が分かったのであれば、尚いいのだが、上手くなることに繋がっただけでも良かったと思う。「“ゆっくりとラケットを押し出す”という感覚を掴むまでに、相当の時間を要しました。それが子どもたちに教える際に役立つと思います」と感想を書いている人もいました。嬉しいです。「自分が楽しむための授業ではなく、生徒に教えるための勉強という、当たり前のことがテニスの授業ですごく実感できました」という人もいました。その人は私担当の器械運動やバドミントンを受けた時にはそこに気づいていなかったことも書いています。私にとって嬉しい感想ばかりを挙げましたが、やはりもっと高いレベルのことをしたかったとか、本気でゲームをしたかったと言う感想もありました。

3　授業評価と今後の課題

1で述べたように、教師と教師の卵が求めることの一致を目指したが、思うようには行かなかったと感じている。特にできない人への運動指導の仕方を教える・学ぶことが両者の一致なのだが、それを分かって貰うには、理論を早い時期に理解して貰う必要があると感じた。身体で感じて掴む力動性を伝えることの必要性、それを伝える運動共感の仕方や考え方、できない人に自己観察させることなどの理論的なことである。それを指導する能力がまだ私に不足していることを実感した。理論的なことを分かり易く伝えられるようにすることにも、今後、努力をしていきます。

3、4回生対象の授業ですが、教育実習で受講者全員がそろうのは11月初めで、12、1月になると卒業論文のことで欠席するというやりにくい授業でした。1で述べたような教師としての切迫性を教師の卵は実技に求めていないように思います。